軍隊教育の裏側

道旗正夫

私は戦争終盤時候補生として新しく設置された情報兵として入隊した。

歩兵を初めとする各兵科と異り全く新しい兵科だったが、先任の隊長以下全員が旧兵科のため、内容はあまり差はなかったのだろう。

教育と訓練には心身とも疲労の連続であった。吾々候補生は今に逆転する階級を夢見て伍長や班長の上等兵に毎日がなぐられの日々であった。

若い吾々は食料の不足をなげき乍ら毎日満腹の夢を見つゝ訓練を続けさせられた。ある晩吾々は食料庫に千切大根の俵詰めがあることを発見した。深夜のくじ引きでこの千切大根を盗む計画を立てた。

ポケット一杯に詰め込み、戦友と少量づつであったが分けあい毛布の中でムニャムチャとやった。少し甘味があり喰みごだえがありその美味なこと忘れられなかった。

ところが翌朝食料班長から班全員集合と呼出された。サテはバレたか？「なぜ大根干しを盗んだか」「腹がへって辛抱出来なかった」「よしそれなら今晩ごちそうをしてやろう」何だそんな事かヨシヨシと。

一同安心したのは言うまでもない。アアよかった。命令通り夕食を取りに行くと場面は一転した。洗面器一杯山盛りになった残飯のかずかず、各自一個の洗面器の残飯を「十分間以内に食べろ」と相成った。とてもじゃないが食えるものではない。涙の方が先に出た。それからがなぐるけるの大ピンタを受け、鼻血を出す友、歯を折られる友、耳鳴りする友など散々な目にあった。こんな事が平然と行われる日本の軍隊の教育方法であった。

吾々が候補生として任命された時は既に食料係の古兵はいらなかった。吾々は必ず仕返しをする約束が空振りの三振になり残念であった。

日本軍隊の教育はこんな教育であった。軍隊は軍隊。要領を以て本分とすべきだとしみじみ感じた。

戦争体験と言えば必ず勝った勝っ